

## メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』における真理の解明と歴史の成立

東京大学 野々村伊純

### はじめに

メルロ＝ポンティの主著『知覚の現象学』では、真理を集中的に論じている第三部「コギト」の章だけでなく、真理という語がこの著作の至るところで登場する。序文においてメルロ＝ポンティは、「われわれは真理の中にいるのであり、その明証性は「真理の経験」である」（PP 17/I 17）と明言する。真理は『知覚の現象学』全体で主題となっていると言え、この著作には伝統的な真理の理解を脱却して、世界との交流にもとづく真理の真相を明らかにするという目的が通底している。メルロ＝ポンティにとって真理は、たとえば数学における理念的なものとしての真理に限定されず、生きられた世界との関りを伴う豊かな内実を持つものである。本稿では、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における真理を取り上げ、歴史の成立との関係からその射程の広さを明らかにすることを試みる。

本稿は次のように進む。まず、伝統的な真理を取り上げ、メルロ＝ポンティの批判を確認する（第1節）。次に、生きられた世界から成立し、言語の考察を通じて解明される真理の真相を論じる（第2節）。そしてメルロ＝ポンティの時間論を取り上げることで、真理の時間的性格の基底が、主観における時間性であることを示す（第3節）。最後に、生きられた世界に働きかけ、そして生きられる歴史の成立の真相について、メルロ＝ポンティは、時間的性格をもつ真理の理解を踏まえていることを究明する（第4節）。

### 1. 伝統的な真理の理解

メルロ＝ポンティが伝統的な真理として想定しているのは、さしあたり三つに分類することが可能である。コギトの真理、幾何学的理念の真理、宗教的な真理がそれである。

#### (1) コギトの真理

コギトの真理とは、デカルトからはじまる思惟する自己の明証性やカントに代表される世界を構成する条件としての超越論的主観性に関するものである。周知のようにデカルトは、方法的懐疑を通じて感覚に基づいて認識する

事物や数学的理念の正しさを疑ったが、その疑う自己の存在は明晰判明であるという真理に到達する。このことは逆に徹底化された懐疑論を招き、物体や自己の不確実性があらわとなるが、カントによって経験を構成する超越論的統覚の不可欠性が主張される。この考えは、フランスの一部の新カント派によって、意識が世界のあらゆる出来事を構成しているという主張へと展開されることになる。メルロ＝ポンティが経験主義者と対置し、主知主義者として批判したのは、レオン・ブランシュヴィックやラシエーズ＝レイといった当時のフランスにおけるこのような新カント派であった。

新カント派の主張をメルロ＝ポンティは透明な主観と考え、世界と自己との関係を正確に捉えていないと考える。もし経験が自己によって構成されたとするならば、世界は私の一部となり、自己の明証性と同じように世界の明証性が得られ、超越論的観念論は絶対的实在論と一致する (PP 434/II 252)。したがって、コギトを重視する主知主義の立場は、あらゆるものを自然的物の物理化学的諸過程に還元してしまう経験主義と変わらない。その場合、自分と完全に断絶したものについて知ることがどうして可能なのかという経験主義が直面する探究のアポリアに主知主義も陥る (cf. Olkowski 2010, 526)。こうして、コギトの真理は、世界や自己について十分に捉えていないとメルロ＝ポンティは主張する。

## (2) 幾何学的理念の真理

一般的に幾何学的理念も永遠の真理であると考えられている。たとえば三角形の内角の和が二直角であることの証明は、経験的世界を超越した永遠の幾何学的理念を示し、証明が正しいのは分析的必然であると考えられている。しかしメルロ＝ポンティは、証明に必要な「の上に」「を通過して」や「頂点」(つまり頂上という意味もある仏語の *sommet*) といった言葉で表現されていることが、そもそも身体的経験に依拠していることを指摘し、幾何学的理念を証明するというのは、定義や条件にすでに含まれている真理について演繹的に明らかにすることではなく、実際に補助線などを引くことを通じて、幾何学的構造を表出することであると主張する (PP 444-5/II267-8)。したがって、メルロ＝ポンティにとって幾何学的理念における真理は、理性によって捉えられる世界を超越して存在する理念ではなく、身体的運動を通じて知覚世界から借り入れられたものである (PP 447/II 271)。証明は何度でも同じことを繰り返すことが可能であることから、証明された理念が安定した構造物であると私たちは確信しているのであって、前提されたものと結論との

間に必然的な連関を私たち自身が認めているだけなのである。

### (3) 宗教的な真理

宗教的な真理は、ブランシュヴィックの記述から読み取れる真理観である。

ブランシュヴィックは語っている——「人間精神の創造力について反省をめぐらすとき、経験のまったき確かさにおいて、つぎのような感情がわき上がってくる——証明することができたある一定の真理のなかに、ひとつの真理の魂のようなものがあって、それがその真理を優越しており、その真理から自由であり、その魂はその真理の特殊な表現形態から離れることによってより包括的でより深い表現へと赴くことができるが、しかし、こうした前進をもってしてもついに真なるものの永遠性に触れることはできない、といった感情が」、と。(PP 455/II 281)

ここでメルロ＝ポンティは宗教について直接述べているわけではないが、ブランシュヴィックの『西洋哲学の意識の進歩』における「宗教的意識」の章から引用している。章題からも明らかのように、キリスト教における〈一者〉としての神と関連する真理である。ブランシュヴィックの記述から読み取れるその真理の特徴は、次のようにまとめられる。真理は、証明可能であるものを乗り越えた先にあり、特殊な表現を越えたより包括的でより深い表現をどんなに試みてたとしても、達することのできない永遠性を有するものである。

それに対してメルロ＝ポンティは次のように問いかける。

だが、何人も手に入れることのできぬこの真なる永遠性とは何であるか。あらゆる表現の彼方にあるこの表現されたものとは何であるか。そうしたものを措定する権利がわれわれにあるとすれば、なぜわれわれの不断の関心がより正確な表現を獲得することにあるのか。人間の精神や真理はあらかじめ設定されたどんな目標にも向かわぬと主張しておきながら、あたかもそれらがそれに向かっているかのようにそれらをしてその周りをめぐらせているあの〈一者〉とは、一体何であるのか。(PP 455/II 281-2)

このような素朴ともいえる問いが生じているのは、「神を措定することなど、われわれの生の解明には何ら寄与するところがないことはたしかである」(PP 455/II 282)と考えていたからである。ブランシュヴィックが主張する

〈一者〉とは人間の精神に対置される精神のことであり、万人にとって同一の普遍的理性としての原理である (cf. P2 251/96)。つまるところ、古代ギリシア哲学やイスラーム哲学を受容したキリスト教神学において確立していった絶対的な神である。このような神は人間の生を超越しているため、身体における世界との内属を重視するメルロ＝ポンティにとって満足できるものではなかった。

## 2. 伝統的真理解の成立と真理の真相

以上の伝統的真理に共通している特徴は、それが不変的で永遠なものということである。このような真理の理解に対してメルロ＝ポンティは次のように批判的に応答する。

われわれのもっている経験は、真なる永遠性のそれでもなければ、〈一者〉への参与のそれでもない。むしろ、時間の偶然のさなかでわれわれがわれわれ自身および他者とのあいだに関係をとりむすぶためにくりかえす具体的な諸行為の経験、一言で言えば、世界への参与 (*participation au monde*) の経験なのであって、〈真理 - 内 - 存在 (*être-à-la-vérité*)〉とは、世界内存在と区別のつかぬものである。(PP 455/II 282)

ここでは、世界内存在が真理内存在と変わらないことが指摘されている。「真理内存在」という言い方は、ハイデガーが『存在と時間』で、「現存在は真理の内存在している」(SZ 221/二 502) と述べ、非隠匿性としての真理 (アレーティア) と現存在の根本構造である世界内存在を結びつけることを彷彿とさせる。ハイデガーはそこで、言明と対象の一致という伝統的な真理解が現存在の開示性としての真理からの派生的な変様であることを主張する。メルロ＝ポンティは、不変的で永遠な真理解が派生的なものとは考えていないが、それを基礎づけているものを見逃していることについて批判している (PP 454/II 281)。

メルロ＝ポンティが真理において重視するのは、「時間的な偶然のさなかの」身体を通じた世界との関係である。身体を通じた世界との交流についての現象学的記述を行うことで、不変的で永遠なものを認める立場を批判し、世界の内存在する実存の究明によって、メルロ＝ポンティは世界の偶然性に依拠した真理を解明する。

身体を通じた世界との交流を明らかにすることによってメルロ＝ポンティは、自己から超越し客観的であると見なされる世界の手前にある「生きられ

た世界 (*monde vécu*)」(PP 495/II 339) を指摘する。そのためメルロ＝ポンティは、新たな真理理解の出発点に知覚を見いだす。ここでの知覚は、単なる諸感覚の集合ではなく、世界と身体の応答によって形態化されたゲシュタルトである。メルロ＝ポンティにとって身体は、主観性によって構成された「道具」(ラシエーズ＝レイ cf. PP 447/II 270) でも、肉や骨が集まった一つのメカニズムでもなく、世界の事物と応答し、経験を成立させる当のものであって、その限りでは客観的対象ではない。私の身体は、世界に対する私の足場であり、パースペクティブの中心なのである。したがって、身体こそが個人的な生を支えているのであり、意識にとって思考するよりも「私はできる」という運動能力が基礎的であることが明らかとなる。そのため、身体を通じて生きられた世界での経験が、真理として見なされてきたものの始原なのであり、生きられた世界から断絶する真理は不可能である。メルロ＝ポンティは、科学や数学といったものも生きられた世界と不可分であり、これまでの文化が破壊され、跡形もなくなってしまったならば、そのような真理と考えられてきたものも残らないと主張する。

メルロ＝ポンティが主張するように生きられた世界が真理の始原なのだしたら、不変的で永遠的な伝統的真理の理解はどのようにして成立したのだろうか。メルロ＝ポンティは、言語がその成立に不可分に関わっていると考える。そのため、メルロ＝ポンティは言語について論じることで伝統的真理理解の成立を明らかにするが、同時にその言語の考察を通じて、伝統的真理理解からは見過ごされてきた真理の真相を明らかにする。メルロ＝ポンティの言語についての主張を正しく捉えるためには、思考内容は言語という道具を用いることで伝達されるという伝統的な言語理解からの脱却が求められる。言語を生理学的な因果的現象へと還元してしまう経験主義と思考の単なる外皮としてしか捉えない主知主義に対して、メルロ＝ポンティは「語は意味をもつ (*le mot a un sens*)」(PP 216/I 291) と主張することで両者を批判する。

私たちは、わかっていながら言葉にできないことにいら立ちを覚えることがある。あるいは、それぞれの文章を構成する各語はそれまで知っている意味を想起するにもかかわらず、書物を通じて自身が考えてもみなかった思考に達することがある。これらの現象は、経験的あるいは心的メカニズムとして言語を解釈してしまう伝統的な二つの立場では説明することができない。このような事例はむしろ、思考は言語によって完成し、私たち自身を超過 (*excès*) していることを示す。メルロ＝ポンティは、このような思考を完成し、自身の思考を超過することができる言葉を真正のないし原初的な言葉と

呼び、人々によって繰り返し語られているだけの二次的な言葉あるいは語られた言葉と区別する（PP 217-8 n./I 295 n.; 321/I 238）。

このような言語理解は、語られた言葉を生気が失われたものとして否定しているようにも見える。しかし、メルロ＝ポンティは「あらゆる表現的な活動のなかで、言葉だけが沈殿作用をおこして間主観的な獲得物を構成することができる」（PP 231/I 311）と述べ、言語には絵画や音楽と大きく異なった沈殿によって意味が保存される特徴を見出す<sup>(1)</sup>。意味が沈殿し保存されることによって、語られた言葉は反復可能性を獲得し、誰もが同じように使用できる公共性が成り立つのである。こうして、言語は文化性を有することとなり、「言葉は自然的存在に対するわれわれの実存の超過である」（PP 239/I 322）とメルロ＝ポンティは主張する。

しかしながら同時に、この特徴によって、ダステュールも明確に指摘しているように、「その際限なき反復可能性（*sa possibilité de réitération indéfinie*）こそがまさに、ことばについて語ることを可能にもすれば、原初的な表現の経験の「地盤」を離れる危険を冒すことを可能にもする」（Dastur 1998, 356/478）。すなわち、意味の沈殿は、すでに使い古された語を用いて過去の遺産と難なく接合させ、それによって未来においても同様にそれを用いることができることを保証するが、他方でこのことが原初的な意味が生成されていたことを忘却させてしまうのである。現在の言語的な意味は過去から未来へと開かれた全時間的なものとなり、それによって、言語的な意味は無時間的なものつまり永遠なものとなされるのである（PP 453/II 278）。

メルロ＝ポンティは、「言葉とはまさしく、思惟が真理にまで自己を永遠化してゆく行動である」（PP 448/II 272）と述べ、ここに伝統的真理解の成立の原因を見出す。すなわち、言語は意味を沈殿させ、何度も繰り返されることが可能となった全時間的なものとして真理を成立させるが、それが無時間的つまり不変的で永遠なものであると見なされるようになったことで伝統的な理解が成立するのである。そのため、不変的で永遠な真理はある種の錯覚なのであり、真理は決してそのようなものではない。

言語の沈殿化作用には、意味の保存とは別のことが含意されており、ここに真理の真相をメルロ＝ポンティは見いだしている。言語における反復可能性は、その反復から逸することも可能にしており、言語には意味を沈殿させつつも常に新たな意味へと開かれていている。なぜなら、言語が繰り返されるといふ特徴は、言語が使用されるたびごとに表現されていることを意味し、そのたびごとに言語と世界と人間との関係は結び直され、自分自身を越え思考を完成させる原初的な言葉へと促す契機を含むからである。そのため、生

きられた世界から意味が沈殿することで成立する真理は、時間のうちで偶然的に変化していくことが可能なのである。

メルロ＝ポンティが捉えた言語の特徴は、自己に対する超過、自然に対する超過、反復可能性に対する超過、これら多重の超過であり、言語は身体を通じた知覚の経験に支えられ、また常に捉え直される契機を含んでいる。生きられた世界を始原にして言語によって成立する真理には、新たな意味を獲得する可能性が含まれており、これまで見逃されていたこのような真理の特徴をメルロ＝ポンティは強調するのである。

以上の考察から、メルロ＝ポンティの真理の理解には次の特徴がある。第一に、生きられた世界は真理にとって始原であり不可分なものである。第二に、言語の意味の沈殿化作用が真理を全時間的なものにさせ、不変的で永遠的なものという伝統的理解を成立させる。第三に、言語における意味の創造性は真理における保持されながらも変化していく時間的な性格を示す。これらの特徴には、主観における時間性が深く関係しており、その解明が歴史の真相へと展開されている。そこで次節では、メルロ＝ポンティの時間性についての主張を簡単に確認し、それがメルロ＝ポンティの真理の基底となっていることを明らかにする。

### 3. メルロ＝ポンティの時間性理解

メルロ＝ポンティは、主観は内的必然性によって時間的であると時間について主張する (cf. PP 471/II 305)。これは、事物のなかに時間があり観察者を不在にする経験主義的見方と、意識が時間を構成すると考える主知主義的見方の二つの立場と対立する。これらの見方は、科学が想定してどのような時間を計算可能なものとして扱うことを可能にする特徴がある (cf. Olkowski 2010, 529)。しかし、メルロ＝ポンティは、主観における時間性を主張することによって、計算可能な時間理解を否定しているわけではない。むしろメルロ＝ポンティの主張は、このような客観的な時間が主観における時間性から成立していると考える。同様に、真理に見いだされた特徴もこの時間性に起因している。

メルロ＝ポンティが主観における時間性として重視していることのひとつが、たとえば机の傷は自分の過去の生活の跡を保持し、私が知覚のうちに存在しない過去の出来事を見出しているということである。これは、私が単に現在の対象を知覚しているのではなく、私とその過去を生きること、これまでの周囲との関係を考慮に入れて知覚していることを意味する。メルロ＝ポン

ティは、このような視座を主にフッサールとハイデガーの時間論から多く取り込んでいる。

フッサールは、『内的時間意識の現象学』において時間意識の解明を試みている。メロディーは各音によって構成されているが、個々の現在の音を聞いているだけであるとすると、音が連関して聞こえるという経験を説明することができない。仮に記憶によって説明するならば、その音は過ぎ去った音という新たな契機を伴った音と理解されるが、その音の記憶は現在のものであって、なぜそれが過ぎ去ったものと同じのものであるとわかるのだろうか。フッサールは提起する（Hua X, 17-8/79-81）。フッサールは、ある時点における知覚（原印象）は恒常不斷に新たな今が登場することによって過ぎ去っていくが、意識の統握する作用によってまとめられ、原印象は喪失することなく次の時点において沈殿することで把持されていると主張する（Hua X, S.7-13）。つまり、過ぎ去った原印象への志向は現在においても失われてはいない。こうして現在のうちに過去が過去把持として沈殿していることによって、過ぎ去った知覚と原印象とを同一にすることが可能となる。その理解を反転させたものが未来予持である。つまり、過去を把持した現在から次の時点がすでに予期されている。いうならば現在は「未来に喰い込んでいる」（PP 478/II 315）。したがって主観は現在を、過去となったものの未来として、これから到来する未来の過去としてもつのである。

他方で、ハイデガーは、現存在に特有の時間的な構造として時間性を見だし、それが通時的な時間の理解を成立させると主張する。「時間性とは、根源的な「じぶんの外にあること」それ自体そのものである」（SZ 329/三 469）とし、将来・既在性・現在という三つの脱自態である。未来に優位性を見いだすハイデガーとは異なり、メルロ＝ポンティは現在に中心を見いだしつつも（cf. PP 490/II 332）、時間の脱自的性格を受容することで「現在に到来しつつ過去に向かう未来」として時間が時熟するというハイデガーの記述を引用し、「現在は自己自身のうちに閉じ込められているものではなく、未来や過去に向かって自己を超越する」と述べる（PP 482-3/II 320-1）。

こうしたフッサールとハイデガーの時間に関する議論を通じて、メルロ＝ポンティは時間性における過去把持と未来予持およびその脱自的性格を捉え、「もし私が現在をなお生き生きとした姿で、それを含蓄するすべてと共に捉えなおすなら、その現在の〈なか〉には、未来と過去とへ向かう脱自があり、これが時間の諸次元を、敵対的なものとしてではなく、不可分なものとして出現せしめる」（PP 485/II 324）と述べる。主体は、過去を把持している現在において、そこから投企される未来に向けて行為するとともに、現在に限



定されない過去の捉えなおしと未来への新たな投企によって、世界へと参与することが可能なのである。

以上のことが意味するのは、主体は決定論的に決まっているのでもなければ、絶対的な自由があるわけでもないということである。オルコウスキが明確にしているように（Olkowski 2010, 542-3）、沈殿した過去の意味が現在に影響を与え、そこから新たな未来を投企することによってこそ、メルロ＝ポンティは「ほかのことを始める能力」としての主体の自由があると考え（PP 516/II 369）。ここから、いわゆる「状況づけられた自由」の内実がより一層明らかになる。すなわち、これはある時間における物理的な状態や人間の身体能力といった条件が課せられた中でも、行為の自由があると単に主張しているのではなく、沈殿していったこれまでの状況や意味が現在に保持され、それから逃れることはたとえかなわなくとも、それを捉え直し投企し直された未来の展望に従って、現在行為することができるとを意味する。メルロ＝ポンティが論じた時間性は、過去から影響を受け、未来を投企するというあり方として時間に厚みを取り戻した自由の在り方を明らかにするのである。

以上のあり方は真理についての基底でもある。言語における沈殿作用と反復可能性は主観の過去把持と未来予持に由来しており、生きられた世界から言語によって成立する偶然的な真理は、主観における時間の脱自的性格によってなされる捉え上げ直しと新たな投企による世界への参与に基づいている。こうしてメルロ＝ポンティにとって真理は、時間性と不可分な特徴を示すのである。

#### 4. 真理の成立としての歴史の成立

前節において確認した時間論は、私が生きている現在には私が生きていない多くの時間が開かれているという考えを導き、私を取り上げ直し引き受ける範囲での集団的な歴史まで拡張されるとメルロ＝ポンティは主張する。しかし、この主張は前節で確認した時間理解だけから十分導けるのだろうか。メルロ＝ポンティは次のような問いを自ら提起している。

われわれの定まらない思考や、われわれの生活上の出来事や、集団の歴史における出来事が、少なくとも一定の時期が来ると共通のひとつの意味、ひとつの方向をもつようになり、ひとつの理念のもとに把握できるようになるのはなぜであるか。（PP 470/II 304）

歴史は、私が直接経験したものを意味付けることによって成立する人生とは

異なり、直接会ったことのない他者と関係するものである。歴史が主観の実際に生きた時間を越えて成立するためには、私が生まれるずっと以前から世界が存在し、人々が生活を営んでいなければならず、反対に、自分が死んで世界のうちに存在することが出来なくなったとしても、世界はそのまま存在し続けなければならない。このような世界の自己超越性つまり客観性の獲得に加え、歴史が成立するためには過去の人々の生活を了解し、個人の生を越えた未来の展望が獲得されなければならない。過去の出来事の単なる列挙や現在に限定された行為は歴史とは言えないのである。

メルロ＝ポンティは、身体における主知主義と経験主義の二つの極端な立場を拒んだように、極端な二つの立場のいずれかから歴史を理解できるという考えを拒否する。その二つの立場の歴史理解とは、歴史は世界を超越した理念性や世界の経済的・社会的条件に従って必然的に展開されるという歴史理解と、歴史は個人の自由な自発性にもとづいてなされた行為によって成立する完全に偶然的なものであるという歴史理解である。これら二つの立場が社会的な位置づけを——メルロ＝ポンティが挙げる社会階級を例にして——考えると、次のようになる。前者は、労働者がプロレタリアとして労働運動を起こすのは、ブルジョワが労働者を搾取するという経済的、社会的な条件による必然的な帰結であると考え。後者は、労働者が搾取される現状に対して革命を欲し、未来への自由な投企を決意することによってプロレタリアになると考える。どちらの場合も社会と主体を過度に抽象化してしまい、社会に位置付けられて生きている主体のあり方を正しく捉えていないとメルロ＝ポンティは批判する。(cf. PP 506-7/II 355-6)

人々にはそれぞれ日々の生活の仕方があり、その生活の仕方は社会のなかで共通している点があることを他者の所作を通じて、意識的に比較することなく人々は感じ、そのような日常的生活を通じて自身の社会的な位置づけを自覚するようになる。自身の社会的な状況を引き受けることで人々の行為が動機づけられると、人々の間で共有される意味(=方向)が、人々が共存する生きられた世界において、その世界へ参与することによって次第に成立し、それがさらなる個人の決意を促す。したがって、社会的な出来事は客観的な条件によって成立するものでもなければ、個人の自由な決意によって成り立つものでもなく、社会に位置付けられた日々の生活を通じて、つまり生きられた世界からそれらは成立する。

この生きられた世界における出来事は、語られることによって各主観を超過する。それによって語られた出来事は、失われ存在しなくなるものではなく、反復可能な意味として沈殿する。言い換えると、自己が生まれる以

前の経験されることのない出来事が、現在において意味を有することが可能となる。したがって、言語によって出来事が表現されることで、自己の生を超越した歴史が可能となり、歴史は人間の生きられた世界を成立させる「共存の基盤」となるのである。

以上のように社会的出来事について明らかにすることで、メルロ＝ポンティは、歴史は様々な出来事を生み出すような観念でもなければ、過去の出来事を並べ集めたものでもなく、「あらゆる個人的な決意に先立って社会的共存と〈ひと(l'On)〉のなかで仕上げられる未来の具体的投企」(PP 513/II 365)であると述べる。このように成立する歴史は、永遠的なものとして見なされた伝統的な真理と同様に、歴史学者などによって現在を超越したものとして理解されることができる。しかしながら、真理が不変的なものではないことが明らかになったように、歴史も不変的なものでも、あるいは何かひとつの地点に進んでいくものでもない。歴史の真相には、人々が共存する生きられた世界で人々の間で共有される意味(=方向)が個人の決意を促すとともに、沈殿した歴史を取り上げ直すことによって新たな未来の方向(=意味)が見出されるようになる点がある。生きられた世界からの歴史の成立は、歴史のダイナミックな両義性、すなわち自己を超越し共存の基盤となる一方で、それによって新たな未来が生成されることを示している。かくして、「一般化された実存と個人的実存のあいだに交換があって、そのそれぞれが受取りもすればあたえもする」(PP 514/II 365)とメルロ＝ポンティは述べるのである。メルロ＝ポンティにとって歴史とは、過去の物語を越えた、未来へと向かう過去を把持する偶然的な現在の生の営みなのである。

以上のことは、メルロ＝ポンティが歴史について、言語において解明された真理の理解を反映させていることを示している。メルロ＝ポンティは、生きられた世界から言語によって成立する真理の解明を通じて、単なる過去の出来事の物語に限られない、生きられた世界に働きかけ、そして人々によって生きられる歴史の真相を見るのである。したがって、メルロ＝ポンティにとって、歴史の意味はひとつの「歴史的真理」(PP 512/II 364)であり、歴史の成立は真理の成立に他ならないのである。

「われわれは偶から偶まで真(vrai)であり、われわれは、物のように単に世界のなかに(dans le monde)存在するのではなく、世界内存在しているという、ただその一事だけで、われわれと共に、われわれがのり越えねばならぬすべてのものをもっているのである」(PP 520/II 375)とメルロ＝ポンティは述べる。メルロ＝ポンティにとって、世界の内に生を有することは、まさしく永遠化されえない真理の内に生を営むことと同義なのである。

## 注

(1) 意味の沈殿化については、次節において時間性一般から簡単に検討するが、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』出版後にソシュール言語学を受容し (cf. Hass 2008, 183)、『幾何学の起源』のさらなる読解を通じて、真理論を大きく展開している (cf. Andén 2018)。ソシュールの言語学を受容したことによる真理の理解の緻密化については、稿を改めて論じる必要がある。

## 文献表

以下の著作については、略号を用いて、原著の頁数、その後に参照した邦訳の頁数を表記した。引用の際には、基本的に邦訳を用いているが、一部原文にあたり筆者が改訳した。引用中の強調はすべて原文による。

Hua X: Husserl, Edmund, 1966, *Husserliana Band X, Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893-1917)*, Martinus Nijhoff. (部分訳) 谷徹訳, 2016, 『内的時間意識の現象学』, 筑摩書房.

P2: Merleau-Ponty, Maurice, 2000, « La philosophie de l'existence », *Parcours deux 1951-1961*, édition établie par Jacques Prunair, Lagrasse, Éditions Verdier, collection « Philosophie ». 加賀野井秀一訳, 1988, 「実存の哲学」『知覚の本性——初期論文集』, 法政大学出版局, 所収.

PP: Merleau-Ponty, Maurice, 2004 [1945], *La phénoménologie de la Perception*, Gallimard, collection « Tel ». 竹内芳郎・小木貞孝訳, 1967, 『知覚の現象学 1』, みすず書房; 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳, 1974, 『知覚の現象学 2』, みすず書房.

SZ: Heidegger, Martin, 2001 [1927], *Sein und Zeit*, 18. Aufl. Max Niemeyer. 熊野純彦訳, 2013, 『存在と時間 (一)～(四)』, 岩波書店.

## その他の文献

邦訳のあるものについては、原著の頁数の次に邦訳の頁数を表記した。引用中の強調はすべて原文による。

Andén, Lovisa, 2018, “Language and Tradition in Merleau-Ponty's Reading of Husserl and Saussure”, *Studia Phænomenologica XVIII*, pp.183-205.

Dastur, Françoise, 1998, « Le corps de la parole », *Merleau-Ponty Notes de cours sur L'Origine de la géométrie de Husserl suivi de Recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty*, Presses Universitaires de France, pp.349-368. 本郷均訳, 2002, 「ことばの身体」, 加賀野井秀一・伊藤泰雄・本郷均訳, 『フッサール『幾何学の起源』講義 付・メルロ＝ポンティ現象学の現在』, 法政大学出版局, 所収.

Hass, Lawrence, 2008, *Merleau-Ponty's Philosophy*, Indiana University Press.

Olkowski, Dorothea, 2010, “In search of lost time, Merleau-Ponty, Bergson, and the time of objects”, *Continental Philosophy Review*, Vol. 43. No.4, pp.525-544.